

クラリスロマイシン長期投与における細菌叢の変化(抄録)

濱島有喜¹⁾ 小関昌嗣¹⁾ 宮本直哉¹⁾ 村上信五¹⁾ 近藤清隆²⁾
羽柴基之²⁾ 鈴木由美子³⁾

名古屋市立大学耳鼻咽喉科¹⁾ 名古屋第二赤十字病院耳鼻咽喉科²⁾

東京総合臨床検査センター³⁾

慢性鼻副鼻腔炎に対するマクロライド系抗菌薬の長期投与療法の有用性については、すでに様々な報告がなされており、当教室でも常用量の半量、及び四分の一量でも効果の得られることを、以前より報告してきた。しかし本来マクロライドは抗菌薬であるため長期投与を行えば病原菌の耐性化、常在菌の消失、真菌の発生など副作用、問題点の発生が危惧されていた。そこで今回我々は慢性鼻副鼻腔炎患者に対し、クラリスロマイシン (CAM) 200 mgを1日1回朝食後経口投与し、投与開始時、2週間後、4週間後、8週間後、12週間後に、中鼻道分泌物、扁桃ぬぐい液を採取し、集中測定にて検出菌種の同定、定量、およびCAMに対するMICの測定を行い常在菌を中心とした細菌学的検討を行った。

鼻腔の投与前病原菌は、ほとんどが投与開始後2または4週で消失し *Coagulase-negative-staphylococcus* に菌交代する傾向にあった。

咽頭の常在菌叢は、菌種数、総菌量では投与開始時からほとんど変化を認めなかったが、菌の構成の変化及び一部菌種でのMIC値の上昇を認めた。また咽頭において真菌の途中発生がおもに高齢者で認められた。